

四 日本靈異記索引解題

○ 江戸時代の靈異記索引

A. 靈異記訓註字類	度会義利編
B. 靈異記訓釈字類	木村正辞編
C. 靈異記訓釈分音	木村正辞編
D. 靈異記索引	伴 信友編
E. 靈異記見要	内藤広前編
F. 日本靈異記類字	編者未詳

部は本文の、いずれもイロハ順索引である。

A B Cは訓釈だけの索引で、そのうちA Bは漢字索引、Cは和訓索引である。D Eは訓釈と本文を一括にしたもので、Dは五十音順の、Eは語義による項目別の各索引。Fは二部から成り、第一部は訓釈の、第二

A 靈異記訓註字類（京都大学附属図書館蔵）
外題に、本文と同筆で「靈異記訓註字類」（内題は「註」）

(を「注」とある。奥に同筆で、
とする)とある。奥に同筆で、

弘化三年十二月廿四日成業 度会義利

とあり、表紙の右下にも同じく「義利自撰」とあるように、度会義利の弘化三年の編になるもの。巻頭白紙一葉、墨村二十一葉。本文片面十行、一行は三段(三訓釈)。書入れは無く、誤字は一々白墨で消して改め、正稿を期している。

本書は、類従本訓釈の標出字の部首別漢字索引である。丁数は示していないが、例えば「傷ウコナ」の圈点、類従本(上序)にあって、仮名遣の誤用を示したものの、また、「燕来」の「来」は、類従本(上5)の誤植(「正しくは」)をそのまま写したものの、これらの例により、本書は類従本に拠って忠実に書写したものと知られる。ただし、同じ標出字の注文は一項にまとめ、

横流又乃、カ比又波多(上序、下26、下)

倭急也又忍也又(上序・下9、中川の三訓釈)

のように、間に「又」を入れて並記する。なお、「漁

夫」(類上11)を「漁父」、
「魁タイヘ」とするような誤写も若干ある。

部立ては、唐熙字典による画数順で、一部・二部・人部から齒部まで一二八部に分かつ。中に、五画の「穴部」と「立部」の間に七画の「里部」を設けて「童良叔部」を掲げているのは、次の「立部」に入れるのを誤ったもの(童は立部)、かゝる部立ての誤りが若干ある。また、「惣」を「惣」と誤写して、「惣家」「載惣」とともに「手部」に入れるなど、部の所属の誤りもある。なお、同一部の中の訓釈の順序は、画数によらず、鑑要記の逐条順とする。

検索に不便なのは、連字をその一方の文字でしかあげていないことである。例えば、「周行上安留文」を「行部」だけにあげていて、「周」については検索できない。「噴然」「往昔」「國司」などいずれも「口部」に入れているように、熟語において意味の重い方の文字で引く方針をとっているが、中には、「暫頃ヒ

「タ」を「日部」に入れるように、徹底を欠くものもある（これは「頃」「比頃」「祀頃」と同じく「頁部」に入れるのがよい）。ところで、注文脱を連字と見做しているのは困る。例えば、「石部」に「礎拳嘘頃不」を「モ」を入れている（「礎」「拳」はともに注文脱——與福寺本上序参照）。

叙上のように、検討を要する余地は多くあり、特に丁数を記していないことが惜しまれるが、類従本訓釈の漢字索引として貴重なものである。なお、備考義利は、あるいは千菅義利が、「宇治山田市史」に、二保に居住した同字者とある。

B 靈異記訓釈字類（鎌）

東洋文庫蔵「觀斎編着書 水村正辞自筆稿本」のうち「觀斎著述目録」に、「靈異記訓釈字類 同附分音一卷」とあるものにあたる。しかし、現物は、題簽に「靈異記訓釈字類」（編）とあり、（内題なし）

また、Cの「靈異記訓釈分音」が別冊になっている。與に本文と同筆で

乙卯五月十五日採筆十九日分類了 垣麿
とある（乙卯は安政二年、（一八五五）垣麿は正辞の字）。墨付六十八葉、本文片面八行、一行は二段（二訓釈）。部ごとに改丁し、余白が多い。

本書は、類従本訓釈の標出字の部首別漢字索引であるが、丁数は記していない。Aと特に異なる点は、第一に、イ本などの同筆の書入れが多いことである。そのイ本は、後記E「靈異記見要」（正辞の書入れあり）のそれと完全に一致するから、これは「見要」を原拠としたものと考ええる。

第二に、部立の特異さがあげられる。すなわち、イ部以下、ア・カ・ナなどまで九十五部に分かち、末尾に「雜字」「連字」の二部を置く。その部首の順序のほか、「ア部」に「隨萬」「都ミヤ」など、こざとへんとおおざとを一括に入れ、「孰セ」のために

「丸部」を設けていることも注目される。しかも、「甫也」以下二十一訓釈を「雑字部」に入れている。この杜撰さは、識語に云うように、数日で分類したためであらうか、字書によらずに私意によって分けたものと考えられる（最後の二部の名称は新撰字鏡によったものか）。適当な部首を思いつかなかったものを「雑字部」として一括し、補訂の余地に比余白を多くとったのであらう。ところで、熟語を「連字部」として一括したのは、Aの義利「字類」よりも検索に便であるなお、その中に、「惣家ナシカラシ」の「家」を朱でかこんで「連字ニハアラズ」と注記して訂するもののほか、熟語でないと認められるものがあり、検討の余地少ししかない。

本書には、前記イ本のほか、天地などに書入れがある。その主たるものは、横斎の靈異記攷証・日本書紀や遊仙窟の古訓・類聚名義抄等であり、また、「惣家ナシカラシ」の注文の右に「子孫義」などと、適宜意義を

も注している。その他、注文中の助詞などを朱でかこんでおり、総じてAの書に比して、編者の私用に供したもののとしての性格が強い。

C. 靈異記訓釈分音（棟洋文）

Bの「字類」で述べたとおり、「横斎著述目録」に載っているもの。内題外題同じ。内題の下に「垣麿集」とあり、奥にも同筆で

右分音一冊（八五五）安政二年乙卯六月朔日草成

垣麿（花押）

とあり、Bの「字類」に続いて短時日にして編んだものである。墨付二十葉。本文片面十行、一行は二段。本書は、訓釈の注文の五十音順和訓索引に、「音注」「字注」の二部を附したものである。

アマタ 数 中六ウ、中三十九ウ、下四十七ウ

（類従本注文は、それぞれ「此方」「アマ」「阿耨」のように、見出しの和訓はすべて片仮名で表示し、誤

写は訂して出しており、類従本の丁数を一々下に附してある。また、義注も、例えば「匪不也」「巨不也」を「アラス」の見出しで掲げ、同様に列記する。どこで、類従本下必「懸安知良比天」を、同上「懸アカラ」・同中22「懸アカラ」とともに、「アカラシク 懸上」と標示して一括するなど、文字のみならず語の小異も記してない。Bと同じイ本の書入れもあるが、はるかに少ない。従って、本書は、靈異記の訓釈の語彙を知るための索引で、これによって、さらにBの「字類」か、あるいは類従本に直接あたるかして厳密を期したものであろう。

本書は、識語に云うように草稿である。排列も第一音節だけの五十音順であって、各部の中は類従本の逐条順となっている。また、補遺の訓釈を適宜朱で書入れている。特に、巻末の「字注部」に入れてある二十三の訓釈の中には、「陳時時名也」など釈にあたるもののほか、「太立」のように存疑のもの（真福寺本「意止」）

など、適当な訓が見出せなかったと思われるものもあり、後日の考証を期して、最後に一括したのであろう。なお、「音注部」は、「字注部」と同じく、類従本の訓釈のとおりに記しているが、類従本の中21「羅及羅精」を単に「羅精卷」とするようになり、並記注の場合に他の注を省いている。

木村正梓博士にとって、安政二年というのは、万葉集三并証が成った年である（各并証自序による）。三并証には随所に靈異記や板倉の攷証が引用されている。Bの「字類」とこの「分音」とは、博士の方葉研究の途上において、必要に迫まれて急遽に編まれたものである。かかる靈異記への関心が、数年の前田家本の発見へとつながってゆくのであり、靈異記研究史上、博士の業績を等閑にしてはならない。

D 靈異記索引（国立国会図書館蔵）

外題に「伴信長翁著 靈異記索引」と、本文と別筆

で書し、奥に本文と同筆で、

文政十年二月十五日分敷粘張畢 他日可清書矣

さらに、外題と同筆で、

右一冊借伴大人遺本課人令書写訖

弘化戊申歳二月 神谷克楨

末尾に、以上とは別筆で

右一卷孟恪神田君所賜也 神原芳野

と朱書してある。

従って、本書は、「国学者伝記集成」の伴信友の著

書の欄にある「日本霊異記索引 一」にあたり、それ

を神谷克楨（三園）が書写せしめて、外題と奥書を託

したものの。巻頭白紙一葉をおき、それに「霊異記索引

と題書している。これに「神原家蔵」の朱印、さらに、

本文第一葉に「故神原芳埜納本」「東京図書館蔵」の

朱印があるから、神原芳野（琴洲）の所蔵に帰したもの

のを、死後東京図書館に納めたものとみられる。

本文二十葉、片面十二行。巻頭に

霊異記索引

上巻ハ巻次張数ヲ只線ノ目次ヲ記セリ
丁数ハ銀票本ヲ用

あるように、類従本によるもので、五十音順に、訓釈

と本文中の人名・地名・物名その他の語句とを一括に

して排列したもの。簡単な注記を適宜加えている。「阿

の部から抄出すると次のとおり。

○字 中第十九 廿四丁 中第廿一 廿六丁 中第廿二 廿七丁

○綾ノ公 中第廿一 廿六丁 中第廿二 廿七丁

○葦蘆之環がごとし 父母之弟ハ一、伯父ヲサシテ云、コレ跡ナルヘシ

下第廿七 世一丁

ところで、訓釈についてみるに、延宝本を原にして

類従本を校合したものがあつたことは注目される。例え

ば、

○阿比太 一本多太 總 中第十九 廿六丁

において、見出しの「阿比太」は延宝本によっており

（東大寺図書館本・田中大秀本等同じ）、「比多太」

が類従本、「阿」の左「イナシ」というのは、校齋の

改証に云う高野本「比太」によるらしい（国会図書館

本は「出水」。

○左ミ岐

點一地作聖トアリ、此第廿ニアルハ左シメテ

ノ誤カ下第
廿三 廿六丁

においても、「左ミ岐」は延宝本、「左シ五」の方が類従本である。なお、この例のように考証を加えたものもあるが、校帙の厳密さには遠く及ばない。

信友が延宝本を所持していたことは、靜嘉堂文庫藏斎藤彦磨本の奥書にも見え、また、京都大学附属図書館に、所持の延宝本の脱漏を類従本で補ったもの（半信友校蔵書第六十六冊）があることによってわかる。彦磨本は源吉従と伴信友の校合書入本であり、随所に「信友云」「信校」云々等として書入れ、中に「信友校」数本」ともあるように、靈異記の校訂に力を注いでいた人物であった。「比古婆衣」「長等の山風」「瀧見の小川」等にも適宜靈異記を引用している。本書もこれらの考証の検索に用いたものであろう。

エ 靈異記見要（無窮会神智文庫・大東急記念文庫蔵）

類従本靈異記の語義分類による語句索引で、初めに目録をおき、本文と十九葉から成る、片面十行、二段、各語に類従本の丁数を注す。無窮会本に「井上頼國蔵」「井上氏」の朱印、大東急本に「正辞按」云々とした朱筆書入れ若干があるほか、編者名も識語も無いが、無窮会本は、十行罫紙の各行のわくに合わせて、各語句を書いたカードが貼付しており、本書の原籍と認められ、大東急本はその写しと見られるから、無窮会本の体裁・筆蹟等を手がかりにして、編者について考察する。

これが内藤玄前（一七九一—一八六六）の編と考えられることは嘗て発表した（「かかみ」第五号）から、略記するが、無窮会に「姓氏録見要」「日本紀見要」部」の二索引があり、いずれも本書と同一筆蹟で、罫紙も同じい。そして、前者に「文政十一年十月編集賢木園稿」と識語があり（賢木園は玄前の号）、その

表紙に頼因翁自筆で「姓氏録見要内藤玄前」とあることにより、本書も玄前の稿とみられる。なお、無窮会蔵頼因翁自筆「神習書目四」の「類語」の項に、右二索引（「内藤玄前手沢」と注す）に並べて「靈異記見要」ともある。

さて、本書は語義によって次の四十の各部に分類してある。

天 歳時 地 地名 石 水 火 神祇 帝王 親王諸王 官職 礼儀 楽器 文具 武具 堂路雜具 靈異 方術 諸工具 居所 珍宝 舟車 桁帛衣服 身体 人倫 墓所 氏姓 名 寺名 僧名 飲食 穀類 器財 木 竹草 鳥 獸 魚 介虫 言語

右のうち、語数の多い地名部・言語部などは、さらに五十音順に分けて排列する。訓釈の大多数は言語部に入れてあるが、他の部にあたるものは、そちらに入れてある（例、「獺トリス」「狸リス」は獸部）。一方、

訓釈に無いもので、言語部に入っている例もある、各

語を分類するにあたっての苦心のあとはいかがえるが、例えば「雄鹿トリス」(獸部)は、本文「近衛舍人雄鹿宿祢木續」(下38)であるから、氏姓部に入れるべきであるなど、検討を要するものがある。また、鬼出し語のよみにも誤りがある。例えば、「骨嶋トリス」(地名部)は、コツジマと訓んだのか、「古行」に入っている。これについて大東急本朱筆書入れに「正辭骨嶋宜訓カハ子シマ、とあり、無窮会本も、朱筆で「今収古部有誤」とあり、無窮会本も、朱筆で「カハネシマ」と傍訓をつけ、「加ノ部入ヘシ」と頭注。

また、「霧セウ上ノニ」(言語部・字行)についても、大東急本に「正辭按、霧訓カカフル、宜入于加部」と朱筆書入れがあり、無窮会本も前記の例と同様に朱筆で訂正している。このように、木村正辭博士によってよみや仮名遣の誤りがかかり訂されている。なお、訓釈の並記注を最初の訓でしか引けないのは不便である（例、「周行トリス」を「女行」にだけ掲げる）。

ところで、本書には、本文と同筆で、左記のように

イ本の書入れがあり、カードに切って分類する前に書いたものようである。

愛宕郡片輪 イ元年イ輪イ 中張 尾 中ハオ (3オ)

喉 イ 佐 イ 支 イ 五 中五オ (69オ)

これを諸本と対校してみると、延宝本の一本で、京都大学附属図書館本、大阪府立図書館本と同系のものである。

前述のように、木村博士はこの字しを披見して、所々に改訂の筆を入れた（大東急本）が、無窮会本の朱筆書入れの中に、その改訂によると認められるものがあるから、両本は互に、實指し合った関係にあると推測される。一方、木村博士は、本書を一原拠として靈異記の訓釈索引BCを編んだとみられることは前記したとおりであるが、BCの編集が安政二年五月であるから、本書の成立はそれ以前ということになる。

なお、広前には、「国史拾遺」（十巻、索引付）の著があり、靈異記の記事も引用しているが、その索引

が、一五六の項目を掲げて整然と分類してあることによっても、彼の索引作成の非凡さがうかがえる。

F 日本靈異記類字 （宮内庁書陵部蔵・東京放
有大学附属図書館蔵）

日本靈異記類標 （国立国会
図書館蔵）

国会本の題簽に「日本靈異記類標。完（圈点）とあり、他の二本はこれを類字とするが、「日本靈異記本訓類字」と「日本靈異記類字」の二部から成る同一本。編者名・奥書ともに無く、編者および書写者は不明である。蔵書印は、書陵部本に「墨阪十一代主字蔵記」、国会本に「柊原家蔵」「故柊原芳笠納本」「東京図書館蔵」とあり、前者は信州須坂藩主で内蔵頭、蔵書家として知られた堀直格の所蔵（「蔵書名印譜」第一輯）、後者はDと同じく柊原芳野の所蔵であったことがわかる。なお、国会本は「林佳園編箋」の罫紙を用いる。本書の第一部は、首題に「日本靈異記本訓類字」とあり、イロハ順に類従本の訓釈を排列したもので、

期尅イノ去不 六ノ左 (以之部)

以下、各訓釈を、標出字・注文・丁数(「一ノ六ノ左」は「上卷六ウ」をさす)の順に記す。書陵部本三十九葉、国会本三十四葉、東京教育大本十八葉。

第二部は、首題に「日本靈異記類字」とあり、イロハ順に類従本の本文の人名・地名等の固有名詞および雑どもいふべき物名・特殊な語句など、計五百十数語を抽出排列したもので、

入鹿 十二ノ左 (以之部)

以下、書陵部本三十二葉、国会本三十葉、東京教育大本十六葉ある。雑は比較的少ないが、その中に、

蜂声似詭経 六十二歳薩鬼 無悶 柴枝皮

上化生仏像 吹毛求疵 生肉团其中有女子

のような、奇異なことがらなどを取意した語句をあげていることが注目される。なお、標出字に「歟炎経」(与之部、歟は上文末、炎は涅槃の二合省字)を挙げると、このような語の抽出の誤りや、「与之部」に「三木寺」

(美貴郡の寺だからミキ寺と訓む)を置くような誤謬による標出箇所への誤り、その他、重出・誤写など若干存するが、これは簡便な本文索引である。

ところで、書字についてみるに、東京教育大本は、二段に書き、第一葉下段以下巻末に至るまで「右」「左」を「オ」「ウ」としてあるなど、大体の体裁からみて改変の手が加わっており、他の二本に比して後の書字になるようだ。国会本と書陵部本とは、ともに忠実な書字と認められるが、前者が十行罫紙によってより整然と書いてあるといった差違があるほか、文字の異同は全く無く、書字の前後は判別できない。両本とも江戸末期頃の書字である。

さて、本書の編者を長沢規矩也氏は小山田与清(一七八一―一八四七)とされる(『国語学辞典』の「索引」の項)。私信によると、書陵部蔵「夫木鈔類標」の跋によられたよし。そこで、その全文を引用する。

昔藤原長着朝臣、採詞筆無言葉、命以夫木、蓋中斷

扶桑、各用其片、掣有松屋翁、拾其屑集其柝、聚積
日久、鬱然成堆、而以筆為斧、運之以繩墨、部類
以今、一閱瞭然、命曰夫木工師抄也、工師工師其
勞矣、予適得寫之、為題片言、以記其勞云此書地理部未得改題于此

弘化二年仲夏下旬

藤原春村

これによると、松屋翁すなわち与清の編になる「夫木工師抄」を黒川春村が写したもので、此の書の地理部を先ず得たからここに跋を書いたものである（「夫木工師抄」は夫木工師抄の地名索引）。その「此書」すなわち「夫木工師抄」というのは、地理部以外の諸部をも併せた夫木工師抄についての索引類をさすもので、夫木工師抄以外の文献の索引はこれに含まないと解されるが、いかゞであろう。現に、与清編の索引一〇五を蔵する彰考館に、他の諸文献の索引と並んで「夫木工師抄」二十一冊があるのである（彰考館圖書目録一〇〇七頁）。従って、「夫木工師抄」の跋だけによ

って、「日本靈異記類字（標）」を与清の編とするとはできないと思う。

長沢氏説によると、書院部蔵の索引双書「類標」一七六卷（その第五十九が「日本靈異記類字」）は与清の編ということになる。書院部の林左馬衛氏の御示教によると、これにはすべて前記堀直格の蔵書印があり、その中には直格と関係が深かった春村の書字によるものないし春村蔵本の写し、幾本があるよし。その個々については未調査の状態にあるようだ。筆者も「日本靈異記類字」のほかは精査していないから、この双書についての言及はさしひかえ、他の資料によって与清編の索引類を追究することにする。

与清著「松屋筆記」を見ると、「類字函の銘」（卷三の一）なる項があり、文化十二年に諸文献の抜書を入口八順に整理して「類字函」（別名「色葉類函」）を作った次第を記している。それを原に彼の膨大な索引群は成ったのである。すなわち、「群書搜索目録」

(国会図書館蔵) 一〇二巻や彰考館の「群書索引目録類」一〇五巻(「彰考館圖書目録」による)としてこれが残っている。

ところで、別著「十六夜日記残月抄補注」(文政四年)に、靈異記の訓釈七例を引用しているから、靈異記の訓釈の検索の便はある程度できていたとみられる。しかし、「群書搜索目録」にも「群書索引目録類」にも靈異記の索引は載っていない。その上、彼の博識を遺憾なく發揮している「松屋筆記」に靈異記の引用が殆ど見られないのである。「於保乎曾持里」の項ではさすがに中二の歌を引用して類従本の表記を泉州志所列本などで批判している(巻八三の廿二)ものの、「西蕃の時の戯語」(巻九三・一九二)では、元享統書や卷の栄常の話を引用しつつも、これの原拠である中二についてはふれず、「蛇の蝦蟇を食ふ因縁」(巻四九の九)にも、中二・中二を挙げていない。「吹毛求疵」「最賢」「術」の項など、靈異記に適切な用例があっ

て、日本靈異記類字にさえもこれを標出しているのにそれらを援用していない。「松屋筆記」には与清の致年の二年前にあたる弘化二年の記事まで見え、彼が板書整理した索引類を援用しつつ、その後半生に随時筆録したものであるから、もしも本書が彼の編であつたら、もっと靈異記を援用したはずである。

従つて、本書は与清の座右に無かつたと考え、これと与清の編とは見ない。強いて与清に關係ありとすれば、その類字画にある靈異記の若干のカードを原に、誰かが編んだものとみるしかない。あるいは全く別人の編かもしれない。例えば、前記「類字画の銘」の文中に名を挙げている村田了阿・岸本由豆流・山崎美成のほか、足代弘訓等も、類標・類語・類字などと題する諸文献の索引を作っている。以上によって、本書の編者は未詳とするのがよい。

附 現代の靈異記索引

明治・大正時代には靈異記が殆ど顧みられなかったためか、その索引は見当らない。昭和もその十年代以降、靈異記研究が隆盛期を迎えるに至って編まれた索引のうち、管見に入った五篇を、訓釈索引を中心にしておいて簡単に紹介しておく。

まず、佐藤謙三氏編「校本日本靈異記」(昭和、明也堂刊)の巻末二十五頁の索引、これは靈異記の検索に最もよく利用されている。訓釈索引と本文の語句索引の二部から成り、それぞれ五十音順に排列し、各説話番号を注する。本書の本文は類従本で、興福寺本・不忍文庫本・前田家本の主な校異を脚注するが、各条末の訓釈については、類従本のそれのあとに、上巻は興福寺本の、下巻後半は前田家本の、各後注をすべて挙げ、不忍文庫本の後注(中巻)と前田家本の割注・後

注を適宜脚注する。

第一部の訓釈索引についてみると、諸本に共通のもの、類従本の訓を代表させて他は省いているから、国語資料として扱う場合は本文を参照する必要がある。義注は、その漢字の音によって、各部の和訓の後に掲げているが、音注は載せていない。

ところで、不忍文庫本中巻の訓釈は、誤字の多い延宝本の一本によっているから、資料価値は甚だ低い点、注意を要する(「国語国文」昭和31・8拙稿)。また、「有留和之久」(興上20)を「有留看之久」としたり、「頭」(前下序)の見せけち印を見落して「若ハレ頭」を挙げるなど、若干の誤謬があり、「戸牟良儼」をコ・への両部に出す不備もある(これはトムラと訓むのがよい、興本上々に「多年良止之天」ともある)。また、検討して改める必要のある訓釈もあるが、総じて、

靈異記の上記諸本の訓釈の語彙を知るのに便利な索引である。

小泉も、「校注真福寺本日本靈異記」(「訓点語と訓点資料」別刊2)の巻末に、訓釈索引を十三頁附し、真福寺本と、頭注した国会図書館本の各訓釈へ音注をのぞくを五十音順に並べた。索引としては至極月次なものであるが、これを本文の訓読・注釈に援用できるように、本文中の該当文字に*印をつけた点、新味を出した。この方法は、日本古典文学大系本の本文にも用いた。

訓釈索引の最後に、

田島毓堂氏編「分日本靈異記類訓釈索引」(謄写刷私家版、五十頁、昭和・6)

を紹介する。これは、底本として、上巻は興福寺本と類従本を対校、中巻は類従本、下巻は前田家本と真福

寺本を対校、これらによって項目を立て、訓釈(注文)・訓読語(標出字)・所在・形式・研究史の五欄を設ける。特に、国会図書館本・三才文庫本・佐藤氏校本・古典全書本・攷証をはじめとする諸氏の考証を参照して適宜校合を加えた上、研究史欄にこれらを注した点は、従来の訓釈索引に類を見ない精緻なものである。訓釈を、釈訓・釈音・釈義に分類し、それぞれをさらに形態によって細分し、形式欄にこれを注しているのも、適切な措置である。排列は五十音順により、全項目に通し番号をつける。同一部の中は訓音義の順、同訓・同音の場合は訓読語の画数順によるなど、端々に至るまで編者の入念のほどが窺える。誤脱も僅少のようであり、その後の研究による要補訂の箇所も若干生じて来ているが、編者はその後(同年9月)正誤および補遺表を作って全きを期された。

これには「総画索引」(八頁)が附されている。これは訓釈の標出字の総画索引で、各漢字に訓釈索引の

号を注する。正字からも異体字からも異体字からも検索でき、また、研究史欄に異同を挙げた漢字をも引ける点、右訓収束引と同じく厳密なものである。

この両索引は、壺異記の訓釈の特質をよく把握した上に、壺異記研究文献を集成したものであるとして、高く評価されるべきものであり、公刊されなかったことが惜しまれる。

本文の語句索引については解説を略するが、前記の佐藤謙三氏校本本の索引第二部のほかに次のものがある。

板橋倫行氏校注角川文庫本「日本壺異記」(昭32)
これの巻末にも三十一頁の索引が附され、当文庫本の頁数を注し、佐藤氏索引とともに、本文の注意すべき語句を検索するに便である。

山内邦夫・柴山正頼両氏編「日本壺異記索引」(日本風俗史学会「古代中世史分科会紀要」)

右第2号(昭39・11)に、人名・地名の二部が十六頁にわたって載り、以後、官職名・社寺陵墓名・件名の三部を、以下の号に続けて掲載の予定とあるが、未刊のよし。これは、日本古典全書本と角川文庫本の両頁数を注し、史料として壺異記の本文を検索するに際して便利であり、続刊が期待される。

本解説を草するにあたり、調査に際して便宜をはかっていたいただいた東洋文庫・国立国会図書館・無窮会文庫・大東急記念文庫・宮内庁書陵部・東京教育大学附属図書館・静嘉堂文庫・京都大学附属図書館をはじめ、個人的にお世話になった長沢規矩也氏・林左馬衛氏・田馬毓堂氏各位に、篤く御礼申しあげる。